琉球大学学術リポジトリ

「社会参画の資質」の育成を目指す平和教育の研究：社会科・道徳における「沖縄の未来を描く平和教育」の実践

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2018-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲谷, 祐美, Nakatani, Yumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41626

「社会参画の資質」の育成を目指す平和教育の研究

—社会科・道徳における「沖縄の未来を描く平和教育」の実践—

A Study on Peace Education Aiming to Train "Qualities of Social Participation "

- Practice of 'Peace Education through Drawing the Future Images of Okinawa' in Social Studies and Moral Education -

仲谷祐美
Yumi　NAKATANI

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

1．はじめに

2017 年 9 月，沖縄県民にとって衝撃的な事件が起きた。沖縄本島中部に位置する読谷村の戦争遺跡「チビチリガマ」が 10 代の少年たちに荒らされた。チビチリガマは，同村内にある「シムクガマ」と並ぶ県内有数の平和学習の場だ。メディアでは事件を起こした少年たちの中には，チビチリガマについて知らなかった者も含まれていたと報じられた。新城（2017a）はこの事件に関し，「戦後 70 年を超え，若者たちの周囲に戦争体験者が少なくなってきていることも背景の一つだと思う。」と述べている。さらに，「沖縄戦から 72 年。学校現場では，沖縄戦の実相を伝えるための取り組みが実践されるが，教員の多忙化で時間の確保が困難などの課題も指摘される。（新城，2017 b）」と言及している。

同時に沖縄平和協力センター（2014）の調査からも，沖縄県の平和教育の課題について，「戦争体験者の高齢化が進む中，平和教育は戦争の『記憶』を伝えるだけではなく，その『記憶』を踏まえた平和の『形成』にも力を注いでいく必要がある」と指摘されている。このことは，現在の平和教育が社会参画へと十分につながっていないことを意味している。

本稿では，実践授業前後に実施したアンケートと社会科と道徳を通した授業実践に基づき，「沖縄の未来を構想できるような平和教育」，「単発的ではなく，継続的な平和教育を行うための手立て」とともに，社会科教員を中心とした沖縄県内の教員へ向け，「『社会参画の資質』の育成を目指す平和教育」の実践と考察を行うことを目的としている。

2．本研究における「社会参画の資質」について

社会参画について北，向山（2014）は，「参加や協力などの類義語とは異なり，より深く社会に関わること」つまり，「計画・立案の段階から，よりよい社会の形成にかかわること」と定めている。同時に，小・中学校の学習指導要領における社会参画について「小学生や中学生がいますぐに社会参画できるようになることを目

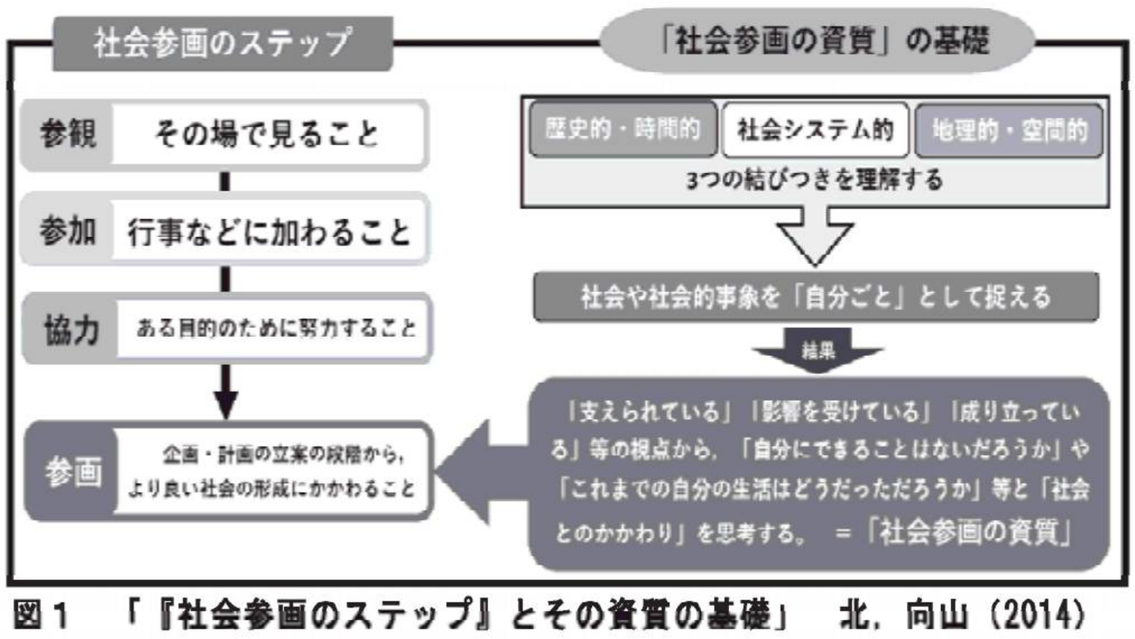

図 1　「『社会参画のステップ』とその資質の基礎」　北，向山（2014）

指しているのではなく，将来社会人になったときに求められる人間像を示している」と述べている。さらに，「子どもたちを国家・社会の形成者として育てるためには，社会科を中心としたあらゆる教科で指導すること」と教科横断的な「社会参画の資質」の基礎を育成する必要性を提言している（図１）。

これらを踏まえ，本研究では北，向山（2014）の「社会参画の対象である社会についてわかるようになること，その社会と自分（たち）の生活と結びついていることを理解すること」という社会参画の定義に加え，「社会的な事象や出来事を他人事ではなく，自分事と捉えている状態かつ，主体的に自ら社会に関わろうとする態度」も含め「社会参画の資質」と定める。

３．研究方法

本研究を行うにあたり，「学習意欲に関する問い」12 項目と「社会参画に関する問い」4 項目を合わせた計 16 項目の「沖縄戦学習に関するアンケート」を５件法（１＝思わない，５＝とても思う）にて授業前後に行った。本アンケートは，沖縄本島中部の米軍基地に隣接するＡ中学校３年生（185 名），本島中部に位置するが，米軍基地に隣接していないＢ中学校２年生（現３年生 146 名），Ｃ中学校３年生（38 名）の３校にて実施した。授業実践は，実習校Ａ中学校では３年生５クラス中４クラスで取り組んだ。

表１　アンケート実施状況と授業実践状況一覧

学校名	学年	クラス		アンケート実施日	人数	実践回数
A中学校	3	a	実践前	5月30日	38	4
			実践後	9月28日	37	
	3	b・c・d	実践前	5月30日	111	1
			実践後	6月19～22日	82	第2時のみ実施
	3	e	実践前	6月1日	36	なし
B中学校	2	（現3年生）	実践前	2月15～17日	146	なし
C中学校	3	f	実践前	6月28日	38	なし

また前年度の研究から，「沖縄戦学習に対する生徒の意欲は高いが，学んだことを自ら発信しようとする等の社会参画への意欲は低い。」（仲谷，2017）ことが明らかになった。そこで本研究では，「社会参画に関する問い」４項目の授業前後のアンケート結果と授業実践における生徒のワークシートの記述から考察する。

４．アンケート結果と授業実践について

（１）「社会参画に関する問い」のアンケート結果（授業前）

ここからは，３校の授業前のアンケート結果をみていく。調査した３校全てが共通して，問１と問３から「沖縄戦学習に対する意欲」や「社会に貢献できる人材になりたい」という意識を持つ生徒の割合は高いが，問２と問４から「社会参画に対する意識」を持つ生徒の割合は低いことがわかる。

表２　A・B・C中学校のアンケート結果（授業前）

	質問内容		A中学校 人数（%）	B中学校 人数（%）	C中学校 人数（%）	合計 人数（%）
問１	小学校、中学校での沖縄戦学習は自分の将来に役立つと思いますか。	思う	145(78.4)	106(72.5)	33(86.9)	284(77.0)
		どちらでもない	28(15.1)	25(17.2)	4(10.5)	57(15.4)
		思わない	12(6.5)	15(10.3)	1(2.6)	28(7.6)
問2	今後、沖縄戦について学んだことを他者（友達や家族）に自分から発信しようと思いますか。	思う	98(53.0)	69(47.2)	28(73.6)	195(52.9)
		どちらでもない	66(35.6)	49(33.6)	8(21.1)	123(33.3)
		思わない	21(11.4)	28(19.2)	2(5.3)	51(13.8)
問３	あなたは将来、国際社会に生きる一員として役立つ人間になりたいと思いますか。	思う	144(77.8)	101(69.2)	33(86.8)	278(75.3)
		どちらでもない	32(17.3)	34(23.3)	5(13.2)	71(19.3)
		思わない	9(4.9)	11(7.5)	0(0)	20(5.4)
問4	あなたは今後、自分から進んで平和に関連する行事や活動に参加しようと思いますか。	思う	68(36.8)	45(30.8)	21(55.3)	134(36.3)
		どちらでもない	88(47.5)	72(49.3)	15(39.5)	175(47.4)
		思わない	29(15.7)	29(19.9)	2(5.2)	60(16.3)

実習校Ａ中学校の授業実践前の結果をみると，問１の肯定的な回答をした生徒の割合は 78.4%とＣ中学校に次いで２番目に高い。この要因は，小中学校の平和学習の成果であると考える。問２に関して肯定的な回答をした生徒の割合は，３校の中で２番目に高くなっているが，その割合は

53.0%に過ぎない。これは，A中学校は米軍基地に隣接していることに関連すると思われる。A中学校の生徒たちの多くは，小学生の頃から米軍基地のそばで生活しているため，常に沖縄戦について考える環境にある。しかし，約半数の生徒しか沖縄戦学習にて学んだことを自ら他者に発信することの必要性を感じていないことがわかる。そのことは，問4の肯定的な回答者数の割合が 36.8%と他校と同様に低い割合を示していることからも伺える。この要因は，A中学校が米軍基地に隣接しているからこそ，平和に関する活動への参加が憚られていると考える。これらのことからA中学校の3年生は，「沖縄戦学習が将来の役に立つ」と認識しているが，平和学習で学んだことを自ら発信しようとする等の社会に参画しようとする意欲が低いことが明らかになった。

B中学校は閑静な住宅街の中にあり，沖縄県内でも珍しい全学年で取り組む「校外平和学習」を特徴としている。毎年，それぞれ学年ごとに県内中部の戦争遺跡を訪問し，1日かけて沖縄戦について学習している。だが，全ての質問において，否定的な回答をした生徒の割合が3校の中でも最も高い。この要因は校外平和学習にて，体験的に平和教育の大切さを十分に理解してはいるものの，毎年の平和教育が「自らの将来」や，「沖縄の未来」を考えるきっかけへと繋がっていない可能性がある。

一方でC中学校は，他の2校と比較して全項目において肯定的な回答をした生徒の割合が非常に高い。この要因としてC中学校では，全校体制にて積極的な「協調学習」に取り組んでいることが関係していると思われる。これに加え，学級担任によれば，「沖縄という地域性と6月という時期」「公民の授業にて『平和主義』の学習をした直後」だったことも影響しているのではないか」と述べている。そして，それは6月23日「慰霊の日」の前後に県内全域で行われる特設平和学習とアンケート実施時期の2つが結果に影響していると推察される。しかし，問4については他の2校と同様に低いことから，社会参画に対する意識は他の2校と差はみられないと考える。

（2）授業実践について

表3　A中学校3年a組，b～d組における授業実施計画

時数	教科	授業名	授業内容
1	道徳	沖縄戦体験者の証言から戦争を学ぶ （情動喚起型授業）	・「沖縄タイムスワラビー・沖縄戦を学ぼう特別版」の記事から沖縄戦の実態を知る。
2	社会	沖縄戦の経緯を知り，慰霊の日の意義を （事実的認識中心の授業）	・日本はどの時期に戦争を終えれば，沖縄戦を防ぐこと（被害を最小限に抑える）ができたのか考える。 ・「今の私にできること」「今年の慰霊の日をどのように過ごすか」考える。
3	道徳	戦争から考える「私たちの未来」 （情動喚起型授業）	・「慰霊の日」をどのように過ごしたか振り返る。 ・宮古高校3年生の上原愛音さん作詩「誓い～私達のおばあに寄せて」を取り上げる。 ・1人の「平和の使者」として，「未来の沖縄」にどんな「バトン」をつないでいきたいか考える。
4	道徳	沖縄と広島・長崎そして，「私たちの未来」について考える （知識基盤・情動喚起型授業）	・「もし，A中学校に原子爆弾が投下されたら？」どのような被害が起きるか想定する。 ・「沖縄の被爆者」について知る。 ・「私たちの未来」を守るために，今の自分が「平和」のためにできることを考える。

沖縄県の平和学習は，小中高等学校にて各発達段階に応じた内容で行われている。筆者は，「小学校で展開されている平和教育は，沖縄戦関連の物語の読み聞かせや体験者の方による講演など，事実に基づきながら児童の心情に訴えかける内容の授業（情動喚起型授業）が多い。一方で高等学校では歴史的な流れに沿い，事象相互の関係把握を指向しつつ，一つの歴史的な出来事としての平和教育（知識基盤型授業）が多く展開されていると思われる。よって，中学校という発達段階では，『生徒の心情に訴えながらも，事実的認識に重きを置いた授業の実践』が必要」（仲谷，2017）と提言している。

これに基づき，授業を構成した。配属学級のa組では，社会科と道徳の時間を合わせた4回，b～d組の3クラスでは，社会科の時間に第2時を1回取り組んだ。

Ａ中学校では，６月に１時間特設で平和教育が設定されていたため，これを軸に全４コマの授業を構成した。実習校における今年度の平和学習は，平和教育担当教諭への聴き取り調査から「同年代の中学生が演じている演劇を鑑賞させ，沖縄戦を全国に発信する１つの手段であることを学ばせることを意図」していることから，沖縄県中学校総合文化祭（2015 年）『マブニのアンマー』の劇の DVD 鑑賞が行われた。

① 第１時　沖縄戦体験者の証言から「戦争」を学ぶ

本時は，沖縄県内の学校に「慰霊の日特別号」として発行されている新聞（「沖縄タイムスワラビー」）を利用し，戦争体験者の証言をもとに授業を実施した。まず，生徒には朝読書と授業の冒頭 10 分間で新聞の９名の体験談を読ませ，自分の心に残った記事を１つ選び，その中で特に印象に残った文章にマーカーで線を引かせた。そして，その記事を選んだ理由と感想をワークシートに記述させた。次に，グループでそれぞれが選んだ記事について感想や意見を交流する場を設けた。さらに授業後には，記事を読んだ感想の掲示物を作成し学級前の廊下に掲示した。生徒たちの作品を掲示すると，何名か他学級の生徒たちも興味を示していた。同時に，「うちの学級でも是非取り組みたい。」と他学級での取り組みも見られた。第１時の証言を読んだ生徒の感想記述例は，以下に記す。

表４　沖縄戦体験者の証言を読んだ生徒の感想記述例

生徒Ａ（女子）	生徒Ｂ（女子）
最後の「死んだ方が良かったと感じることもある。」という文がとても印象に残りました。今の時代は命が助かったから喜ぶのが当たり前なのに，戦争が終わっても「どうしてあなただけ生き残ったの。」と言われることはとてもつらかったと思います。戦争は，戦争が終わっても人々を苦しめるものなんだなと思いました。友達はみんな死んだのに自分だけ生き残ってしまった罪悪感もあると思います。今までは，戦争が終わって良かったなどの本を読んだことはあったけど，戦争で生き残った方が死んだほうが良かったといった証言は初めてでした。なので，戦争が終わってからも苦しめられている人がいることを忘れてはならないと思いました。	私は，「悲しむ感情さえも無くした。」という記事の文を読んでびっくりしました。今は，人が死んだら何人もの人が泣いて悲しみ，小さい動物が死んでも悲しむ人がいます。地元の人じゃないから死体を放っておくなど，今では全然考えられません。また，家族とはぐれて「親戚の山小屋に姉と非難」ってどんな感じなんだろうと思いました。まず，私たちは家族と離ればなれになることが少ない。あるとしたら自分たちが大人になり，自分の身の周りのことを自分ででき，考えて行動できるようになってからだと思います。それなのに，子どものときに親と離ればなれになってしまうと何をしたらいいのか，どこに行ったらいいのか分からなくなると思います。今ではあり得ないことだと思います。それほど戦争は，辛くて苦しかったのだと思いました。

② 第２時　沖縄戦の経緯を知り，慰霊の日の意義を理解する。

本時は，事実的認識力の向上を目的に「日本はどの時期に戦争を終えていれば，沖縄戦を防げたのか考える」ことをテーマに取り上げた。導入では，沖縄戦の特徴を穴埋め形式のワークシートにて復習させた。そして，1929 年（世界恐慌）から 1945 年９月７日（実質的に沖縄戦が終結した日）までの年表から，沖縄戦を終わらせるタイミングとして相応しいと思う時期を 15 個から１つ選ばせ，黒板に掲示した年表の該当する番号にネームプレートを貼らせ，全員の意見を交流した。そして，自分の選んだ番号の根拠を教科書や資料集を使用し，ワークシートに記述させた。その後，４人グループにて個人の意見を交流，グループの意見を集約させ，各グループの意見とその根拠を発表させた。そして，今日の授業を受けて自分の意見が交流前と変化した生徒にネームプレートを移動するように指示し，根拠を発表させた。ネームプレートを使用することで，「他者の意見を聞き，自身の意見を再び考え直すことで，より自身の意見を深めること」を意図した。終末には，「沖縄県慰霊の日を定める条例」から慰霊の日が制定された背景を説明し，今後の慰霊の日の過ごし方や今の自分が平和のためにできることを考える場を設けた。

表５　第2時ワークシート記述例

生徒C（男子）	生徒D（女子）
僕は，今日の授業を受けて思ったことがあります。日本は，真珠湾攻撃をする前にちゃんとアメリカと話して，日米平和条約を結んで仲良くしていたら，あんなに人も死ななかったのではないかと思いました。	沖縄戦で亡くなった人は，約24万人だったと知り驚きました。去年は，12時になったら黙とうするだけだったけど，今年からは戦争について本を読んだり，テレビや新聞で学習したりしてもっと詳しく知ろうと思います。

③　第３時　戦争から考える「私たちの未来」

本時は，上原愛音さん（宮古高校３年）作詩「誓い～私達のおばあに寄せて」を取り上げ，に重きを置いた情動喚起型の授業を行った。この詩は，沖縄県平和祈念資料館が毎年募集している「児童・生徒の平和メッセージ」にて今年度，高校生の部詩部門で最優秀賞に輝いた作品である。この作品は，慰霊の日に糸満市の平和祈念公園で開かれた沖縄全戦没者追悼式で朗読された。筆者が現場で録画した映像を流した後，この詩を再び個人で読ませ，心に残った文章を選び，その理由をワークシートに書かせた。そして，４人グループを作ってそれぞれの記事を選んだ理由や意見を交流する場面を設けた。授業の終末には，詩のフレーズにある「平和の使者」と「バトン」という言葉を用いて「沖縄の未来へ平和のバトンをつなごう！」をテーマに未来に受け継ぎたい物事を考える時間を設けた。そして，第１時と同様に授業後に掲示物を作成し，学級前の廊下に掲示した。

表６　第3時ワークシートの記述例

受け継いでいきたいもの・こと	理由
海・空	・この沖縄の自然を二度と沖縄戦の時のような海や空にしないように平和の素晴らしさを後世にも伝えていこうと思った。 ・戦争をすると海は船で黒くなるし，青い空は爆弾を落とした戦闘機などで黒くなってしまうから。
平和を願う気持ち	・いつまでも平和な世界が続くようにという想いを次の世代に伝えていきたい。
戦争の悲しみ	・戦争では家族，知人や恋人を失う人が多い。失えば，悲しみ以外は何も生まれない。だから，これを次の世代に「バトン」を伝えていきたいから。
沖縄戦を伝える本や写真	・沖縄戦体験者はどんどんいなくなって沖縄戦を伝えられる人がいなくなってしまうので，沖縄戦を全く知らない人が出てこないようにするため。
「慰霊の日」	・これからも慰霊の日を続けていくことで，沖縄戦の記憶を受け継いでいきたいから。
○○の塔（地域の慰霊塔）の存在	・自分たちの住んでいる地域の慰霊塔の存在を伝えることで，地域の歴史も同時に受け継いでいけるから。
米軍基地	・基地がある限り，（沖縄戦を）絶対に忘れることはないと思うから。 ・基地があるから今は，どこの国からも攻められないから。

④　第４時　沖縄と広島・長崎そして，「私たちの未来」について考える。

本時は，夏休み明けの９月下旬に「沖縄と広島・長崎そして，『私たちの未来』について考える。」をテーマに取り組んだ。これまでは沖縄戦に特化した実践だったが，本時は「北朝鮮の核ミサイル問題」と広島・長崎の原爆を関連させた授業を実践した。導入にて，「北朝鮮に対する被爆者の訴え」の新聞記事から最近の世界情勢について確認させた。そして，広島・長崎の原爆投下について復習させた後，Ａ中学校を中心とする地図を提示し，広島・長崎の原爆被害をＡ中学校の属する市町村に置き換えて考えさせた。「もし原子爆弾が落とされたら，どんな被害が起こるのか」を個人で予想させた後，グループにて意見交流と各グループの意見を発表させた。そして，原爆の被害を爆心地から１キロメートルごとに説明し，ワークシートに色を塗らせた。終末には，「沖縄の被爆者」とＡ中学校が所在する自治体の「反核，軍縮を求める平和都市宣言」，沖縄と核の関連について説明し，本時の授業で考えたことをワークシートに記述させた。

表７　第４時ワークシートの記述例

生徒E（男子）	生徒F（女子）
今の自分にできることは，戦争に対する呼びかけだと思います。今はできなくても，近い将来には必ずやってみたいと思います。これが今の自分ができる平和と自分たちの未来に対する考えです。	過去の戦争についてしっかり勉強し，次の世代に語り継がなければならない。自分の子や孫に語り継いでいけるのは，自分しかいないから。小さな喧嘩や争いごとを無くし，優しくすることで大きな争いや戦争につながることはないと思う。だから，今一度自分の行動を一人一人が見直すことが必要。
生徒G（男子）	**生徒H（女子）**
今，北朝鮮とアメリカ合衆国の間では，どちらとも分かり合おうとせずに戦争が始まろうとしています。戦争は，死者が出るだけの無意味な戦いです。平和にするためには，電車で老人が席に座れないときに譲ってあげられる，そういった思いやりが大事だと思います。僕も思いやりを心に持ち，人のためにできることをしていきたいです。	私たちが平和のために出来ることは，小さなことで揉めないようにすることや，平和について考える時間を普段の授業に取り入れることだと思う。他にも沖縄戦や広島・長崎の原爆の悲惨さを子孫に伝えていくことも「平和」ために自分たちができることだと思う。

５．アンケート結果と考察

（１）「社会参画に関する問い」のアンケート結果（授業後）

授業実践を４回全て行ったａ組は，問４に肯定的な回答をした生徒数が授業前 39.5%から授業後 48.6%と 9.1%と増加していた。否定的な回答をした生徒の割合に授業前後で変化は見られなかったが，「どちらでもない」と回答した生徒の一部が「思う」へと授業後に変化したと思われる。

表８　ａ組（4回）とｂ～ｄ組（1回）の実践前後のアンケート結果

	質問内容		a組 授業前 人数（%）	a組 授業後 人数（%）	b～d組 授業前 人数（%）	b～d組 授業後 人数（%）	A中学校e組 人数（%）
問1	小学校、中学校での沖縄戦学習は自分の将来に役立つと思いますか。	思う	27(71.1)	27(73.0)	94(84.7)	68(82.9)	24(66.6)
		どちらでもない	7(18.5)	7(18.9)	12(10.8)	14(17.1)	9(25.0)
		思わない	4(10.5)	3(8.1)	5(4.5)	0(0)	3(8.4)
問2	今後、沖縄戦について学んだことを他者（友達や家族）に自分から発信しようと思いますか。	思う	21(55.3)	21(58.3)	66(59.5)	59(72.0)	11(30.5)
		どちらでもない	11(28.9)	11(30.6)	35(31.5)	15(18.2)	20(55.6)
		思わない	6(15.8)	4(11.1)	10(9.0)	8(9.8)	5(13.9)
問3	あなたは将来、国際社会に生きる一員として役立つ人間になりたいと思いますか。	思う	27(71.1)	24(64.9)	92(82.9)	68(82.9)	25(69.4)
		どちらでもない	8(21.0)	9(24.3)	15(13.5)	12(14.7)	9(25.0)
		思わない	3(7.9)	4(10.8)	4(3.6)	2(2.4)	2(5.6)
問4	あなたは今後、自分から進んで平和に関連する行事や活動に参加しようと思いますか。	思う	15(39.5)	18(48.6)	47(42.3)	43(52.4)	6(16.7)
		どちらでもない	15(39.5)	11(29.8)	48(43.2)	28(34.2)	25(69.4)
		思わない	8(21.0)	8(21.6)	16(14.4)	10(12.2)	5(13.9)

授業実践を１回行ったｂ～ｄ組についても，授業前後で結果に変化が見られた。特に問２と問４については，肯定的な回答をした生徒の割合が大幅に増加している。問２は 59.5%から 72.0%，問４は 42.3%から 52.4%とどちらも 10%以上の増加がみられ，「どちらでもない」と回答した生徒数も授業前に比べて 10%近く減少し，肯定的な回答へと変化していることがわかる。このことから，否定的な回答から肯定的な回答へと変化し，社会参画に対する意識の変化がみられたと考える。

同時にｂ～ｄ組は，問３の全項目において，授業前後で割合の変化はほとんど見られなかった。この要因としてこのアンケートは，４時間の授業実践を見通して作成したものであるため，単発で実践した第２時の授業の内容が問１の回答へとつながりにくかったことと，授業前から肯定的な回答をしていた生徒の割合が高かったことが関連していると考える。

これらのことから，本研究の授業実践は「社会参画の資質」の育成の基礎を培うために有効なものであったと考える。本来であれば，１年間を見通した授業計画が必要である。しかし，本研究の実践は４回が限界だった。ここでは，４回または１回の実践から，わずかながらの効果が見られた。１年あるいは，３年間を見通した継続的な実践がより質の高い「社会参画の資質」の育成へ連なると推察する。

（２）考察

ここからは，ａ組の特に変容が見られた３名の生徒の変容を中心に分析していく。

表９ 4時間実践クラスにおけるワークシート記述内容の変容

	生徒I（女子）	生徒J(男子)	生徒K（女子）
第1時	看護師目線の話はあまり聞いたことがなく，看護婦に兵士の病気が移ってしまい，苦しんでどうしようもなく，それでも兵士の看病をしなければならないという嫌な思いをしたという背景が戦争にある思い，悲しく思った。死体もむごくてその処理をする人がいたり，嫌でも兵士として参戦しなければいけない人がいたり，辛い気持ちを持ちながら国のためにと頑張らないといけない人々が出ないように，戦争に反対していこうと考えさせられた。	この証言をしているOOさんは，私より若い１２歳の時に戦争を体験しており，彼は父親から手りゅう弾を託され，使い方を教わったことに衝撃を受けました。しかも，その手りゅう弾を受け取ったOOさんが少しほっとしたと証言していたことに驚きました。このように，死ということに安心を与えてしまう戦争は本当に怖いと思いました。	手りゅう弾，しかも自決用のものを自分の子に渡し，「家宝だから誰にも渡すなよ。」と伝えたことに疑問を抱きました。手りゅう弾は，決して家宝なんかではないと私は思います。手りゅう弾を家宝と思ってしまう状況を私はとても辛く思いました。私は父や母，友人や兄弟，親せき，全てが大切です。それを奪うものを私はきっと許せません。だから私は，戦争をしたくないのです。自分の日の前で大事な人が死ぬのを見たくないからです。
第2時	今まで慰霊の日は休みだからと遊んでいたけど，今年は沖縄戦の残酷さや戦没者の無念などが分かっているから，沖縄戦について考える日にしたい。今日の授業で，沖縄戦を避けるための方法を考えて，自分の喧嘩を防ぐ方法にも結び付けて考えた。	まず戦争について調べ，よく知り，他の人たちに伝えていくことが私たちが戦争を起こさないために出来ることだと思います。「慰霊の日」には，上にあげたことを実行し，自分で戦争のことについて考え，自分なりの考えを持ち，戦争のことを考える一日にしたいと思います。	（慰霊の日に）寝てばかりではなく，戦争の事を考えてこれから自分はどうするか，どうしたら戦争がなくなるのかなどを考えたいと思います。黙とうなどもしたいと思います。
第3時	平和の詩を読んで，「おばあ」たちが体験した戦争の悲惨さ，そして今の私たちがやるべきことを考えさせられた。私たちが次の世代へバトンタッチすべきことは何なのか考え，それを実践したいと思った。	今日の授業を受けて，バトンをつなげていくためには，改めて戦争はしてはいけないと思いました。祖先たちがつないできてくれた命のバトンの思いを受け取り，その思いをまた次の世代へとつなげていきたいと思いました。	基地がある限り，絶対に（沖縄戦を）忘れることがないと思うからです。この詩を書いた人がすごいな～と思った。自分なら無理。今まで慰霊の日なんてあんまり気にしていなかったけど，少しずつ意識していきたいと思いま
第4時	平和というのは，友達と自分という一対一の中で，喧嘩をしないことやクラスなどの集団メンバーと仲良くすることと考えられる。だから，いわゆる「チクチク言葉」は使わない，相手に感謝・尊敬の念を持つなど，少し難しいけれど大事なことをしっかり考え行動し，友達にその動きを広げていくことだと思う。例えば，喧嘩をしたら仲直りするように，自分の非を認めることも大事。	平和というものは，悪いところを改善していこう，良くしていこうという気持ちから生まれるものだと私は思います。なぜなら，世界が核爆弾や戦争などを「悪いこと」と見なし，良くして平和な世の中にしていこうとしているからです。なので，まずは自分の周りの悪いところを改善していくことが「私たちの未来」を守るために今の自分ができることだと思います。	私一人だけだと世界は変わらないけど，私が「平和」について訴えることで多くの人の共感を呼ぶことができれば少しずつ世界は良くなっていくと思います。私がそれをできなくても私たちの子孫に戦争の怖さを伝えることで「平和」について何かをしてくれると思います。きれい事ではあるけれど，自分の大切な人のために今，自分ができる事，誰かを幸せにすることを頑張りたいです。まずは，家族や友人から幸せにしたいと思います。

第１時では，沖縄戦体験者の証言をもとにした情動喚起型の授業だった。そのため，証言から戦争に対して，「辛い」や「怖い」，「悲しい」「驚いた」などの記述が多くみられたことから，生徒の感性に影響を与えたことがわかる。また，表９の３名にはみられなかったが，表４の生徒Ｂの記述から戦時中の出来事を現代に置き換えて考え，「自分事」として捉えることができている。だが，社会参画に対する考えや行動につながると思われる記述は，全体的にほとんど見られなかった。

第２時では，表５生徒Ｃのように歴史的な出来事をもとに自分の考えを述べている記述が多くみられた。また第１時では，「戦争はつらい」や「悲しい」などの表記していた記述に加えて，生徒Ｄ・Ｊ・Ｋのように，「どうしたら戦争がなくなるのかを考えたい」「戦争について本を読んだり，テレビや新聞で学習したりしてもっと詳しく知りたい」など，戦争について考え，学習したい等の記述をした生徒が増え，沖縄戦に関する知識習得への意識の向上が伺える。また，生徒Ｉは第２時にて，沖縄戦を防ぐ方法から「自分の喧嘩を防ぐ方法」に結び付けて考え，自身の実生活と関連させた記述内容が見られた。

第３時は，未来に受け継いでいきたい物事を記述させた（表６参照）。ａ組で最も多かった記述は，沖縄の「海」や「空」だった。その理由として生徒の記述から，戦時中は海から米軍が上陸し，空には無数の戦闘機で海と空が黒く染まってしまったと認識していることを読み取ることができた。また，「○○の塔の存在」といった自分の住んでいる地域の慰霊塔と記述し，自分たちの地域の沖縄戦についての出来事を伝えていきたいと記述し生徒もいた。さらに，ａ組の中で２名（男女各１名）が「米軍基地」と記していた。その２人に理由を尋ねてみると，男子生徒（生徒Ｅ）は，「米軍が今の日本，沖縄を守っているから。現在の日本では，国を守れない。」と述べていた。その一方，女子生徒（生徒Ｋ）は，「基地がある限り，絶対に（沖縄戦を）忘れることがないと思うから。」と，米軍基地の存在そのものが沖縄戦の事実を表しているため，後世へ受け継いでいくことができると言及していた。さらに，その他の生徒への聞き取りや授業中の生徒の会話から，米軍基地があるがために，自分たちの生活が危険にさらされていると認識していると思われるが，実際は米軍基地が生活や文化の「一部」となっていることが分かった。また，この実践から全体的に生徒の記述に変化がみられるようになった。生徒Ｊのように，多くの生徒が今の自分に出来ることを考え，「友達とケンカをしない」や「体験者が少なくなってきているので今，ちゃんと話を聞いておきたい」などの具体的に自分が平和のためにどのようなことに取り組むことができるのか考え，記述しているように思われた。

そして第４時では，第３時に比べてより自身がどのような行動を起こせばよいのか記述している生徒が多くみられるようになった。表８と表９からは，現在の生活を振り返り，改善し自分の周りにその動きを広げていこうとする姿勢がみえる。生徒Ｊは，第２時で「戦争について調べ，良く知り，他の人たちに伝えることが自分たちに出来ること。」と記述している。第４時では，より具体的に「自分の周りの悪いところを改善していくことが『私たちの未来』を守るために今の自分ができること」であると，より未来を見据えた記述内容に変化した。さらに生徒Ｋも，「私がそれをできなくても，私たちの子孫に戦争の怖さを伝えることで『平和』について何かをしてくれると思う」と未来を見据えた記述へと変化している。

これらのことから，Ａ校での実践は効果があったと考える。４回授業を実施したａ

組では，問４の回答が授業前と変化した生徒が 39 名中８名（20.5%）いた。その詳細は，「思う」から「とても思う」１人，「どちらでもない」から「とても思う」１人，「どちらでもない」から「思う」４人，「あまり思わない」から「思う」２人である。回答が変化した生徒のコメントには，「この平和学習を通して興味を持った。」「平和記念公園に慰霊の日に行ってみたいと思った。」等が見られた。この他にも，「平和の大切さ，非戦の誓いを自分から発信したいと思った。」「沖縄戦体験者が減っていくから，今度は，自分たちが体験者から聞いた話や授業で習ったことを後世に残していきたい。」など社会参画へとつながると思われる記述内容が 39 名中 16 名（41.0%）見られた。このことは，自らが社会に生きる１人の人間としての強い意識と自分たちが未来へと沖縄戦の記憶を受け継いでいかなければならない使命感を抱いている生徒が多いということを示している。

６．おわりに

本研究は，「社会参画の資質」の育成を目指す平和教育を目的として行った。本研究の授業実践を行うにあたり，生徒たちの生活する地域を常に意識しながら，教材研究に取り組んだ。実習校Ａ中学校は，米軍基地に隣接している。授業後の生徒の感想の中にも米軍基地に関する意見がいくつか見られた。また，生徒の保護者のなかには，米軍や自衛隊の関係者が少なくないため，現在の学校現場での平和教育は，対象となる生徒たちへ最大の配慮のもとに実践が展開されている。しかし，その配慮には学校教育での平和教育において，基地問題を扱うこと自体が避けられていることが含まれているように思われる。新城（2016）は，「基地問題は経済の問題ではなく，沖縄人（ウチナーンチュ）の生き方にかかわる問題」であると述べており，これからの平和教育には，対象となる生徒の人格や尊厳を保ちつつ，沖縄戦学習とともに基地問題について学習する場を設けることが求められるだろう。これは，今後の学校教育における平和教育の大きな課題である。

最後に，本研究の授業実践は本大学院のカリキュラム上，実習校であるＡ中学校のみの実践となった。また，Ａ中学校のカリキュラム上の制約と現場での経験がない著者にとって，どの実践においても自身の経験不足を強く実感した。しかし，多くの実習校や大学院の先生方が支えてくださり，実習を重ねるにつれ，自身の成長を感じることが出来た。今後は本研究での成果と課題を現場において経験を重ね，解決方法を試行錯誤しながら，自身の教師としての力量形成につなげていきたい。

文献

新城俊昭（2016）.『戦後 100 年へのメッセージ：2045 年のあなたへ，私たちは沖縄戦から何を学んだのか』沖縄時事出版，p. 117

同上（2017a）.「チビチリガマ損壊『少年の気持ち分からぬ』遺族ら損壊修復」琉球新報 9 月 17 日，p. 29.

同上（2017b）.「届いているか平和教育：その歩みと課題戦前教員の『罪』引き継ぐ」琉球新報 10 月 17 日，p. 19.

北俊夫，向山行雄（2014）.『新・社会科研究授業研究の進め方ハンドブック』明治図書出版，pp. 83-88.

沖縄平和協力センター（2014）.「沖縄県における平和教育の調査：平和教育の可能性」『沖縄県対米請求権事業協会・助成シリーズ』第 50 号，p. 1

仲谷祐美（2017）.「社会参画力の育成を目指す平和学習の実践：沖縄戦学習の実態から」『琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻年次報告書』第 1 号，pp. 41-44.